

柳 菟 小



三重県神道青年会報 第 36 号

◆◆◆ 会長挨拶 ◆◆◆

会長 神田 基



平素は青年会諸活動におきまして、県内各社、役員を始め会員の皆様方には格別のご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年四月二十七日に開催された定例総会におきまして第二十三代会長に選任を頂きましてから、早や一年が経とうとしております。就任前は「自分のような者にこの重職が務まるだろうか」「奉務神社の社務との両立が出来るだろうか」等、数え切れない程の不安を抱えておりましたが、この様な私を奉務神社、役員の皆様は後押しして下さいました。浅学非才の身ではございますが、「やれ」と言われて引き下がるのは男ではありません。受けたからには腹を括って自分出来る全ての力を出し切り、神青最後の二年間を完全燃焼して卒業したいと思えます。

節の年。これまで諸先輩方がこの会に懸けてこられた熱い想いを拝察しますと、大変身の引き締まる思いがいたします。連綿と受け継がれてきたその想いを、形として昇華する事も私の務めであると考えます。

昨年三月十七日に開催された「創立六十周年記念大会」は、中野哲彦前会長の主導のもと成功裏に収める事が出来ました。この大会で得た事はとても大きく、我々は心一つに強い絆で結ばれました。その後、我々は様々な事業に取り組んで参りましたが、特筆すべきは周年事業である「神宮別宮月讀宮新御敷地清掃奉仕」(以下「清掃奉仕」と「宇治橋渡始式奉仕」)であります。

「清掃奉仕」は「第三十回お宮の子供会」に併せて行いました。子供会は私の奉務神社であります。猿田彦神社で開催され、地域の皆様のご理解、ご協力により五歳、十一歳の未来を担う子供たちが多数集まりました。地元の子供たちにとって月讀宮は、猿田彦神社と同様に大変身近なお社です。伊勢に生まれ育った者としてその御遷宮

に関わる事が出来たのは、掛け替えのない思い出となったことでしよう。しかしそれだけではありません。私は毎日の出社の際、登校中の子供たちに出会います。その中に恥ずかしそうにチラチラとこちらを見ている子供がいるのです。私が「おはよう！」と声を掛けると「覚えてくれたんやあ〜！」と満面の笑顔で駆け寄ってくるのです。

子供たち同様、私も嬉しい事この上ありません。単なるひと夏のイベントではなく、その後の地域と神社の繋がりが、人と人の繋がりを作る。これこそが先輩方が守り伝えてこられた「お宮の子供会」の心であると思えます。そしてその心は代々受け継がれ、今年一つの形になりました。神青協定例表彰の事業賞を受賞したのです。これも諸先輩方が努力に努力を重ねてこられた成果であると深く御礼申し上げます。今後その心を守り伝えるべく事業を続けたいと思えます。

またもう一つの周年事業である「宇治橋渡始式奉仕」では、会の代表として参列の栄を賜ることが出来ました。神青関係での参列者

は、神青協の春木会長の他は私しかおらず、神宮お膝元の会としての重さを改めて実感いたしました。ご奉仕されている神宮職員の皆様におかれましても、自分が青年会活動を通じて知り合った方の如何に多いことか。この様な機会、人との繋がりを与えて頂きました事は、私にとって一生の宝物となっております。三重県神道青年会に心から感謝致しますと共に、残り少ない任期ではございますが一杯のご恩返しをさせて頂きたいと思えます。

来年度は東海五県の当番県として様々な行事がございます。皆様にはご無理なお願いにあがる事もあるかと思えますが、今後とも変わらぬご理解とご協力を頂き、より一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

新年参拝 (二見興玉神社にて)



新年参拝 (二見興玉神社にて)

葉

榊

◆◆◆ 副会長挨拶 ◆◆◆

副会長 石上 陽 祥



本年度もあっという間に一年が過ぎました。何事もなく諸行事を進められました事、ご協力頂いた皆様に心より御礼申し上げます。

さて、今回オリピックでスノーボード・ハーフパイプに出場した国母選手の服装や態度についてマスコミが大きく取り上げました。国を代表している限り、常識的な姿勢は必要ですが、最近のマスコミの右に倣への報道の仕方は酷くなってきているし、その報道になんの疑いもなく頷いている人達もいます。どのチャンネルを回しても同じ事を言っている。人情が感じられません。

人情といえば、俳優の藤田まことさんが先日お亡くなりになりました。藤田まことさんと言えば「必殺仕事人」の中村主水、「剣客商売」の秋山小兵衛、「はぐれ刑事純情派」の安浦刑事。みんな人情味に溢れた主人公達でした。

子供の頃から時代劇が好きでした。「水戸黄門」「暴れん坊将軍」「三匹が斬る」「影の軍団」など、でも一番好きだったのは「必殺仕事人」でした。当時は他の時代劇と必殺は何処か違うと感じていました。今考えると「水戸黄門」や「暴れん坊将軍」は勧善懲悪でしたが、必殺仕事人はそうではありませんでした。人と人との物語でした。

「剣客商売」の著者、池波正太郎氏の小説「鬼平犯科帳」に次のような行があります。「人とは、妙な生きものよ」「はあ...?」「悪いことをしながら善いことをし、善いことをしながら悪事をはたらく。ここをゆるし合うた友をだまして、そのところを傷つけまいとする」【明神の次郎吉より抜粋】

人は善い事もするし、悪さもします。常識は必要ですが常識に流されすぎても道を逸れる事もあります。「平常識」、常識を身につけよう。常識の意味を考え、常識を疑う態度が今の私達には必要なのではないでしょうか。今後とも青年会の活動に会員諸兄のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

◆◆◆ 副会長挨拶 ◆◆◆

副会長 時田 雄 平



昨年四月より副会長を仰せつかっております。今まで理事の経験もなく、青天の霹靂。皆様よりご指導を賜り、務めさせて頂いております。

この一年を顧みれば、創立六十周年の佳年を迎え、記念事業として神宮別宮新御敷地清掃奉仕や宇治橋渡始式助勢、記念誌の発行と正に節目の年でした。

お宮の子供会に併せて行った皇大神宮別宮・月讀宮での清掃奉仕は、やがて御殿が建ち並ぶ御敷地で未来を担う子供たちとともに汗を流し、落ち葉を拾った経験は何事にも代え難いものでした。昨年十一月三日、新たに架け替えられ齋行された宇治橋渡始式において助勢の機会を賜ったことは、お膝元の神青会として誇りに思うとともに日頃神宮で奉仕する身としては、大変心強く感じました。また、総務・広報委員会委員長は、

創立六十周年実行委員会の記念誌部会長として、本誌と記念誌の二冊の「榊葉」の編集に携わりました。皆様より原稿を頂戴し、無事発行することができました。洵にありがとうございます。特に記念誌は、たびたび深夜まで真剣だからこそ賑やかな会議を行い、ようやく完成に漕ぎつきました。努力と情熱の結晶だと思っております。今後、当会の礎となることを期待します。

六十周年も一区切り。次の十年へのスタートとして、事業をさらに充実させてゆく必要を感じています。ありがたいことに神青会だからこそ許されることもあるように思います。神青会だからできる活動もあります。仮に勢い余って失敗したときには、先輩諸賢よりご指導を賜わりたく存じます。さらに活気あふれる神青会を目指し、神田会長のもと集大成の年となるよう尽力する所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

◆副会長挨拶◆

副会長 宮崎 吉史



早いもので昨年四月に副会長・教化研修委員

と重責を拝命して、約一年経とうとしています。

これまで青年会役員として活動して参りましたが、この一年は当然、今までの一役員としての活動よりも青年会活動の中での責任がより重いものになりました。そんな中でつくづく感じたのは三重県神道青年会六十周年記念のテーマである「絆深く、広げる輪・和」がいかに重要であるかと言った事です。

青年会活動を通して色々な人に出会い、時には協力し合い、そしてお世話になりましたが、何をやるにしても会員相互の絆を結び、又新たな出会いを得た人々とも絆を結び強めなければ良い活動は出来ません。そして絆を結び深めて行けばより広い絆を産みさらに広がって行きます。これは至極当然の事ではあります。現代社会において

希薄になりがちである絆の重要性を再認識するきっかけとなりました。

昨年度の活動を振り返って特に印象に残るのは、教化研修委員会での主な活動の一つである「お宮の子供会」の活動です。委員長として迎える初めてのお宮の子供会であり、六十周年事業の一環であり、さらには第三十回という記念すべきお宮の子供会を無事に終える事が出来るか不安でたまりませんでした。教化委員会の面々、会員の皆様の協力の下無事開催され無事に閉会式を終えた時の喜びは格別でした。

会場であった猿田彦神社の職員の皆様、また三重県神社保育団体連合会の皆様には大変お世話になった事、心より感謝を申し上げます。また、参加してくれた子供達が笑顔で帰路に就く様を共に見送り、安堵の表情で見送った参加会員の皆に感謝しつつ、一つの行事を成し遂げた事で今までも確実に絆を深めた事を実感出来た事を嬉しく思います。

これからも青年会活動を通して絆を結び青年会の枠を超えて絆を強く深くする活動をしていきたいと思いつつ、さらには副会長の立場として、会員相互の絆を強め深める活動の一助が出来ればと思います。

役員紹介

会長

神田 基 猿田彦神社

副会長

時田 雄平 神宮

石上 陽祥 津八幡宮

宮崎 吉史 結城神社

総務・広報委員会

宮田 幸尋 敢國神社

新山 英洋 鴨神社

林 陽典 神宮

中山 貴生 神館飯野高市本多神社

渡邊 守真 二見興玉神社

竹内 一将 加世智神社

松井 達弥 神社庁

教化・研修委員会

遠藤 嘉章 彌都加伎神社

楠 直幹 阿自賀神社

山内 健史 神宮

遠藤 玲 八幡神社

三橋 航 海山道神社

木村 浩二 飯野神社

渉外・福祉委員会

杉原 将一 多度大社

廣岡 靖晃 岡八幡宮

福井 健士 猪田神社

馬場 正徳 加富神社

營田 英聖 椿大神社

浅野 嘉之 神宮

監事

中野 哲彦 多度大社

原 忠照 八阪神社

平成二十年度定例総会

四月二十七日、神社庁会議室にて中野会長以下役員・会員三十名、来賓二名の出席にて開催された。

開会儀礼の後、会長挨拶、来賓の石上紀男神社庁長・居附秀樹三重県氏子青年協議会長より祝辞を頂戴し、その後吉田副会長を議長に選出し議事へと移った。

まず会長より二十年度会務報告、事務局より会計決算報告、監事より会計監査報告が行われ、夫々承認された。次に中野会長任期満了に伴う役員改選が行われ、新会長に神田副会長が指名され、新役員を代表して挨拶を行った。(その他監事・役員は上段参照) 引き続き、創立六十周年記念事業中間決算を報告の後、二十一年度活動方針案並びに事業計画案、同会計予算案が審議されて承認を受け、定例総会は滞りなく終了した。(宮田幸尋記)



新職員交流会

六月二十六日、三重県宮サンアリーナに於いて開催され、会長以下三十名(新職員十五名)がインディアカを楽しんだ。

試合は、五チームに分かれ、リーグ戦で行われた。羽に触れたことがない会員がほとんどで、初めは慣れない者同士戸惑っていた。しかし、五分もすればコート内からは楽しくスポーツをしている雰囲気気が充分に伝わってきた。その中でも、抜群のチームワークを見せた神田会長率いる南部・神宮ブロック①チームが優勝した。

終了後は、神宮会館に場所を移して、表彰式並びに懇親会が行われた。今回は、三重県神道青年会の活動写真を中心としたパネルを作成し、新職員にどのような活動をしているのか少しでも触れられるような試みを行った。(浅野嘉之記)



第三十回お宮の子供会

八月六日・七日の日程で伊勢市に鎮座する猿田彦神社(宇治土公貞幹宮司)にて開催された。

初日、神田会長を始め五十三名(子供三十二名)が集まり、まず正式参拝が行われた。子供達は皆神妙な面持ちで、事前に教わった参拝作法で参拝を行った。その後開会式に続いて子供達は五つの班に分かれ、それぞれの班旗の作成と夜の余興を考えた。その後の神社境内の散策では神職の方の説明に、子供達は目を輝かせながら、熱心に聞き入っていた。



夕食後は、庭燎の集いを行い、各班が考えた余興や会員による演劇、花火で楽しみ親睦を深めた。そして夕拝の後就寝となった。

翌朝、五十鈴川に移動し朝の清々しい空気の中、禊を行った。夏季の禊といえども五十鈴川の水は冷たく、また初めてのことでは皆緊張

し身を震わせながらの禊であった



が、禊後の子供達の顔は引き締まり晴れやかだった。身も心も清らかなになった後は朝食をとり、皇大神宮別宮である月讀宮において御敷地清掃奉仕を行った。真夏の日差しが照りつける中、御敷地の草抜きや落ち葉拾いに汗を流しながら一生懸命奉仕した。やがて新たな御殿が建つ御敷地を清掃奉仕したという貴重な経験は、会員にとっても、子供達にとっても忘れられないものとなったであろう。その後は猿田彦神社へ戻り、昼食に流しそうめんを体験し、正式参拝、閉会式が行われ全日程を終了した。

子供達はこの二日間の集団生活を通じて、絆の大切さや素晴らしいと感じ取ったのではないだろうか。また神社を身近に感じてもらうよい機会になったと思う。(松井達弥記)

会務報告

〈平成二十一年四月〉

九日 神社総代会総会助勢

二三日 神青協創立六〇周年記念大会

二四日 第六一回神青協定例総会

二七日 平成二〇年度定例総会

三〇名出席 神社庁

平成一九・二〇年度卒業式

四〇名出席 茂波

一三日 神青東海地区定例協議会

二八日 静岡県神道青年会創立六〇周年記念式典

五名出席 静岡市内

三日 第一回役員会

二六日 新職員交流会

三〇名参加 県営サンアリーナ

二七日 日本会議三重設立一〇周年記念大会助勢

五名奉仕 皇學館大学

三日 神青東海地区定例協議会

六日 四名出席 深志神社

九日 第二回役員会

一八名出席 神社庁

三日 第三回役員会

一六名出席 猿田彦神社

六日 第三〇回お宮の子供会

二名参加 猿田彦神社

七日

神青協夏期セミナー

八月二十七日・二十八日の両日、神社本庁大講堂を会場に開催され、当会の六名を含む全国の会員約百名が参加した。

「国学皇学と現代神道」を主題として、第一講を國學院大學研究開発推進機構の松本久史准教授が「国学と現代神道―現代国学生活のススメ」と題して、本居信長の『馭戒概言』を紹介し学問界では宣長による狂信的な皇国中心主義の代表作とされる同書が、その内実はむしろ牧歌的であり、樂觀的記述が多い事を指摘され、宣長の「漢意」批判も単なる排外主義や復古主義ではなく、物事を空理空論で捉える態度を諷めたものであることを力説された。

第二講を皇學館大学の松本丘准教授が「皇学と現代神道―現代皇学生活のススメ」と題して、平泉澄氏等の論考に見られる皇学の説明として「先皇の遺訓を奉じ、先哲の指導を



受けて、国体の護持をその本分とする所の敬虔なる学問」「皇国に対する強い信念をもち、それを単なる信仰、信念に止めず、その実践をめざした学」等の記述を紹介し「皇学は天皇や国体など、皇国をより強く意識した学問で君臣のあり方がその中心にあると捉えられる」と指摘された。

翌日の第三講では、「国学皇学を如何にして実践するか」と題し、両講師を交えて討論会が開かれ活発な意見交換がなされた。

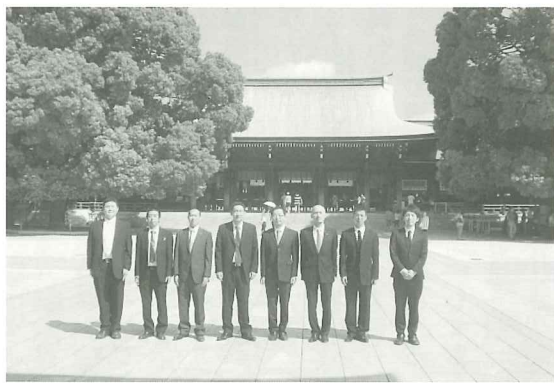
研修会に参加し、改めて「国学皇学と現代神道」が如何に難しい問題なのか考えさせられた。

(馬場正徳記)

県外研修

八月二十八日・二十九日の二日間に行われ、八名の会員が参加した。

一日目、前日まで行われた神青協夏期セミナーに参加した会員と合流し、靖國神社へ向かい、正式参拝を執り行った。一分間の黙祷では、神々と同じ時を過ごすうちに、日々の感謝と共に清々しさが込み上げてくるのを心身ともに感



じた。その後、遊就館を拝観。数々の遺品や歴史を辿るにつれ、御鎮座された英霊たちが、日本の為に多大なる力を注がれたことを学び、これを決して風化させてはならないことを改めて実感した。

二日目早朝より、明治神宮を参拝し、続いて日枝神社に正式参拝を行った。その後、東京大神宮を参拝し最後に皇居を見学し本研修を修了した。

今回参拝した四社とも、神々が御鎮座されるにふさわしい自然に包まれた境内があり、都心であっても悠久の自然が護られていることに感動した。

(山下真史記)

神道青年東海地区協議会教化研修会

九月三日・四日の二日間に亘り、「戸隠」―祈りの村から今を見つめる―を主題に、長野県長野市戸隠周辺を会場として開催され、会長以下五名が参加した。

一日目は、長野県神社庁にて総会が行われた後、戸隠地区に移動し、参加者は五軒の宿坊に分かれ、各宿坊において座談会が行われた。戸隠地区は比叡山・高野山と共に「三千坊三山」と呼ばれるほど多くの修験者を集めた日本の聖地の一つであり、戸隠山勧修院顕光寺という神仏混淆の寺院を中心に名を馳せた。しかし、明治時代神仏分離令を受け、寺を分離して以降、戸隠神社が中心となり現在に至っている。多くの参詣者を迎え入れるために戸隠神社周辺には現在も宿坊が存在し、宿坊において神行事が日常的に行われている。座談会では、各宿坊において各神社の現状、参拝者への対応、教化活動等々様々なテーマを設け、積極的な意見交換を行った。

た。戸隠神社の太々神楽は、古事記の天岩戸開きの神話に由来しており、現在の神楽舞は十数種類あり、その中から五種類を拝観した。神楽の担い手は戸隠神社周辺の宿坊の主「聚長」が重要な役割を果たしていた。その後、研修会として聚長の一人である二澤久昭先生により、「戸隠信仰を伝えた人々」と題して、戸隠信仰の歴史・特徴・現状等々の講義を頂いた。そして研修の締めくくりに、戸隠神社奥社に参拝した。雪深いこの地域では、冬の期間は参拝が中社までであり、奥社までは約三十分なだらかな山道を登った末に参拝することができるのである。



(浅野嘉之記)

第四十回上野・阿山氏子青年の集い (観月会)

九月十二日、サンピア伊賀(伊賀市)を主会場に開催され当会から七名の会員が参加した。



菅原神社(高田喜博宮司)に正式参拝の後サンピア伊賀にて式典が行われた。当日は生憎の雨で残念ながら月の観賞はできなかったが、会場には上野阿山の各神社の氏子青年会のハッピーが多数展示され、活動が盛んであるということが伺われた。また、懇親会ではステージにて各神社の氏子青年会が、自分たちの氏神様を始め、会員の良さなどをアピールしながら、会場内を盛り上げるなどこの地域の氏子青年会の力強さを感じた。

(林陽典記)

- 二七〇 神青協夏期セミナー
- 二八〇 六名参加 神社本庁
- 二八〇 県外研修会
- 二九〇 八名参加 靖國神社他
- 〈九月〉
- 三〇〇 神道青年東海地区協議会総会並教化研修会
- 四〇〇 五名参加 戸隠神社
- 二二〇 上野阿山氏子青年の集い 七名参加 伊賀市内
- 二九〇 敬神婦人連合会総会助勢 一三名奉仕 神宮会館
- 四〇〇 第四回役員会 一三名出席 神宮会館
- 〈一〇月〉
- 六〇〇 神青協秋期セミナー
- 七〇〇 二名参加 神社本庁
- 一五〇 第三八回初穂曳 一名参加 伊勢市内
- 三〇〇 神社関係者大会助勢 一七名奉仕 神宮会館
- 四〇〇 第五回役員会 一五名出席 神宮司庁
- 〈十一月〉
- 三〇〇 宇治橋渡始式 会長参列
- 二二〇 一三名助勢奉仕 内宮
- 二二〇 天皇陛下御即位二〇周年奉祝行事助勢 一三名奉仕 伊勢市内
- 二六〇 天皇陛下御即位二〇年をお祝いする国民祭典助勢 一名奉仕 皇居前
- 二七〇 神青協遷宮啓発研修会 二名参加 伊勢・鳥羽
- 〈十二月〉
- 五〇〇 敢國神社例祭助勢 五名奉仕

- 一〇〇 第六回役員会 一六名出席 結城神社
- 一三〇 二四名参加 茂波
- 一八〇 神宮大麻頒布促進運動 一八名奉仕 彌都加伎神社
- 二八〇 第七回役員会 一三名出席 猿田彦神社
- 三〇〇 新年会 二八名参加 すし久
- 三〇〇 建国記念の日啓発活動 (神宮・南部ブロック) 八名参加 宇治橋前
- 六〇〇 氏青・神青合同研修会 一二名参加 伊賀市内
- 八〇〇 建国記念の日啓発活動 (中部ブロック) 八名参加 津駅前
- 九〇〇 建国記念の日啓発活動 (北部ブロック) 八名参加 四日市駅前
- 二六〇 神宮・南部ブロック研修会 二四名参加 神宮会館
- 〈三月〉
- 一〇〇 神青協・神政連合同研修会 二名参加 神社本庁他
- 一〇〇 第八回役員会 一九名出席 神宮司庁
- 一〇〇 神宮神青・泉神青合同研修会 三三名参加 神宮司庁
- 一〇〇 北部・中部ブロック研修会 一七名参加
- 一六〇 津市中消防署中署 神青協中央研修会
- 一七〇 九名参加 宮城県内

神青協秋期セミナー

十月六日・七日、神社本庁にて「生成期の現代神道」を生命倫理と現代神道と題し開催され、本会より二名が参加した。

まず、小林威朗氏（國學院大學 研究開発推進機構研究補助員）より「臓器移植と現代神道」との講義を受けた。神道人が臓器移植を考える上で必要な生命倫理や現状を説明された。続いて「命の尊厳と生命の定義について」と題し討論会が開かれた。命とは宿る、授かることを再認識し、神社の祭祀や人生の儀礼に潜在する理念等も含め、神社界として今こそ現代のさまざまな問題に対応すべきだと総括された。

二日目は、中野裕三氏（國學院大學 研究開発推進機構特別専任講師）より「神信仰と現代神道」を荒魂考」との講義があった。荒魂を祭る祭祀は、霊験あらたかな神霊の御稜威の発揚を前提とすると考察された。

この研修を通じて、今後更に歴史観、宗教観について理解を深めることの重要性を再確認した。

（井関一隆記）

初穂曳

十月十五日・十六日の両日に亘り初穂曳が行われた。外宮に奉納する陸曳（十五日）と五十鈴川で船を曳き内宮に奉納する川曳（十六日）があり、当会から一名が陸曳を御奉仕した。

当日は秋晴れに恵まれ絶好の初穂曳日和で、午前十時より始まった。今社から外宮までの道のりを全国各地より集まった一日神領民約五百名と町衆と呼ばれる伊勢市民約三千名の人々とともに、奉曳車を外宮へ曳き入れた。その後、初穂の束を一人ひとりが五丈殿に奉納し、御垣内参拝を行った。

今回初めて初穂曳に奉仕させて頂き、伊勢市民を始め全国の方々の真心こもった初穂を大神様に奉献する崇敬の念に心を打たれた。

（楠直幹記）



宇治橋渡始式助勢奉仕

十一月三日、内宮饗土橋姫神社前にて斎行され、当会より十二名が参加した。当日は寒いながらも晴天に恵まれ、朝日に照らされた宇治橋はまばゆく、「ハレ」の刻を待つかの様であった。

早朝より、羽織袴や留袖に身を包んだ三夫婦の供奉参加者らが緊張した面持ちで受付を埋め尽くし、我々は案内誘導を行った。

定刻、遠くから斎館を出る太鼓の音、暫くして玉砂利の音が聞こえる。渡女は旧神領に住む三世代夫婦そろそろ一家の壺が選ばれるのであるが、その渡女以下参列員は仮橋を渡り、饗土橋姫神社に到着。渡女の次に嫁とその孫嫁が並び、その後ろに渡女の夫が並ぶ。



写真提供 神宮司庁

修祓ののち萬度麻奉奠・献饌、祝詞奏上、八度拜、撒饌、そして萬度麻を宇治橋西詰の北側第二柱の擬宝珠に奉納する。続いていよいよ渡始である。渡女一家先頭に、橋工、大宮司以下神職、そして全国から選ばれた三代夫婦六十組が列を成す。仮橋を渡り宇治橋を渡るのだが一日で二往復ほどする渡女の方は八十をとうに越えているとは思えないほど元気な足取りで進まれた。事前に読んでいた故竹内浩三氏の詩「宇治橋」が思い出され涙がこぼれた。三夫婦そろろことは芽出度いことだが、加えて貴いことで奇跡であると思う。足ることを知る、ここに「在る」ことがありがたい、そう思う一日であった。

（吉田真子記）

天皇陛下御即位二十年をお祝いする国民祭典助勢奉仕

主催 天皇陛下御即位二十年奉祝委員会
天皇陛下御即位二十年奉祝国会議員連盟

十一月十二日、皇居前広場並びに皇居外苑にて盛大に開催され、当会より神青協（一四二名）の一員として、第一部「奉祝まつり」の沿道警備の任にあたった。

当日は皇居近くの東商ビルに集合し他団体とともに事前説明を受けた後、現地確認を行った。既に各所では祝賀パレードの準備が進められており、笛やお囃子の音色で賑わう中、有志にて宮内庁前で記帳を行った。



午後二時半、沿道には寒いながらも多くの観衆が詰め掛け、歩道の確保と周辺警備に務めた。第二部「祝賀式典」では我々助勢団体も特別に入場を許可され、三万人の聴衆と共に御即位二十年を奉祝した。

（宮田幸尋記）

天皇陛下御即位二十年奉祝行事・伊勢

十一月十二日、伊勢市において天皇陛下御即位二十年奉祝行事として、三重県奉祝委員会主催による提灯行列が開催された。県下より大勢の人が集まり、総勢約二千人が行列に参加し、大いに賑わった。

夕刻より宇治浦田の駐車場にて行列に参加される方々に提灯を配り、辺りが暗くなる午後六時半頃に内宮へ向けて出発した。おかげ横丁を通り、新しい宇治橋前にて万歳三唱をした後、特別に内宮の夜間参拝を行った。夜間に約二千人もの人々が持つ提灯の明かりが揺れ動く様は美しく、まさに壮観であった。

世界の平和と国民の幸福を一心にお祈りされる天皇陛下の節目を言祝ぎ、大御代がいつまでも続く事を願わずにはいられないと感じた。

（木村浩一記）



神青協遷宮啓発研修会

十一月二十六日・二十七日の二日間に亘り、神青協主催の「知らず学ぼうお米作り」と題した神宮両宮への新穀奉納と遷宮啓発研修会「神宮に受け継がれる日本のこころ」が開催された。

本年春に神青協を通じて全国に配布され、それぞれの家族が心をこめて作った新穀が両宮神楽殿に献穀された。その後、鳥羽市のエクスピア鳥羽へと移動して遷宮啓発研修会が開催された。森林の再生活動などに取り組みされているC・Wニコル先生をはじめ神宮参事の河合真如先生ほか二名の先生方をお迎えしてパネルディスカッションが行われた。ニコル氏はこの日本らしい自然、自分の生まれ育ったこの国を愛する心を日本人はしっかりと胸に刻んでいかないと断らない事を熱く語られた。

二日目は十名程度の各班に分かれて一般の人々に遷宮をいかに啓発していくかをテーマに活発な討論がなされた。

（福井健士記）

神宮大麻頒布促進運動

十二月十三日、鈴鹿市御鎮座の彌都加伎神社（遠藤龍夫宮司）氏子地域にて、神宮大麻頒布活動をさせて頂いた。

当日は会員・神宮研修所の学生十八名参加のもと、午前中は氏子区域内の恒例拝戴者を廻り、午後からは新規の新興住宅街を訪ねた。神宮大麻の意義とその神徳の宣揚に努め、百十体を頒布した。



現代社会では、氏神・氏子の紐帯が希薄化し、御神札をお祀りしない新興住宅街においては、神社神道さえもあやしげな宗教の勧誘に誤解される状況である。しかし、この頒布活動の姿は、斯界に身を置く者にとっては非常に尊いものであることも実感できた。今後は、先ず神社というものを広く地元氏子に触れてもらい、神社神道の奥深さを知って興味を持ってもらうことが大切であると感じた。

（山内健史記）

建国記念の日啓発活動

北部ブロック

活動日 二月九日(火) 午後三時半
 場所 近鉄四日市駅前
 参加者 八名

当日、いざ配り始めてみると、笑顔で受け取られる方が居る反面、素通りされることも多くあり、なかなか思うように気持ち伝えられないもどかしさもあった。しかし参加会員八名が協力し、心を折ることなく奮闘した甲斐もあって、一時間足らずで予定の千枚を配布し終えることができた。この活動が建国記念の日について関心を持つきっかけとなれば幸いである。



(中山貴生記)

中部ブロック

活動日 二月八日(月) 午後三時半

信号待ちの車やタクシーの運転手にも声をかけてまわる熱心な会員の姿も見られた。声をかけた人々は概ね笑顔で種を受け取ってくださり建国記念の日の事をもう少し詳しく教えてほしいと言われる人もおられ、この活動の大切さを改めて感じた。戦後世代が国民の大多数を占めている現代において私たち青年神職が地道にこのような活動を続けていく事は大変有意義なことである。



ありまた我々も尚、一層祖国である日本の歴史を勉強していかねばならないと感じた。(福井健士記)

神宮・南部ブロック

活動日 一月三十日(土) 午後一時半
 場所 宇治橋前
 参加者 神宮五名 南部三名

本年は神宮ブロックと南部ブロック合同にて開催された。当日は土曜日ということもあり、参拝の方も多く配布を開始するにあつという間に準備した二千二百枚の種が貰われていった。目標にしていた若年層への浸透が叶ったかは解らないが、中には両親に手を繋かれた幼児の姿、お婆さんの手を引く青年など、幅広い多くの方々に趣旨を理解して頂けたのではないかと確信している。この啓発活動を通じて、もっと大勢の人々に建国記念の日について知って頂きたい。我々の活動をもっと身近に感じて欲しい。(渡辺守真記)



民子青年協議会との合同研修会

二月六日、伊賀市御鎮座の菅原神社(高田喜博宮司)にて開催され、当会からは会長を始め十二名、氏青からは三十二名が出席した。開会儀礼・正式参拝の後、高田宮司より講話を拝聴した。

その後、伊賀流忍者博物館に移動し忍者の演舞を拝観した。また忍若屋敷では、どんでん返し等のからくりを見学した。次にだんじり会館へと移動し、国の重要無形民俗文化財に指定されている菅原神社神幸式の様子をあらわした「だんじり」や「鬼行列」の人形等を見学した。地元の人でさえ知らない事も多く、あらためて自分達の町の伝統文化を学び直した。

その後、菅原神社に戻り懇親会に移った。各テーブルには伊賀の地酒が置かれ、皆それぞれ味わいながら、親睦を深めた。



(廣岡靖晃記)

葉 柳

第八回ブロック研修会

北部・中部ブロック

内容 「普通救命講習」
 講師 津市中消防署中署
 宮坂千秋救命救急士
 日時 三月十二日
 場所 津市中消防署中署
 参加者 十七名

講師より「心肺蘇生法」や「AED」の基礎知識を学んだ後、実技を行った。受講者は五、六名のグループに分かれて人形を用いた心肺蘇生法を体験し、救助活動における周囲の安全確認や胸骨圧迫(心臓マッサージ)の位置、力加減などの指導を受けた。続いて、昨今初期救命の重要性から、一般人でも使用が可能になったAEDの実技を体験した。AEDを使用できる様にしておく事は時代の要請であり、受講生の興味も強かった為、様々な質問をぶつけては自分のものにしていった。



講師より和傘の歴史について説明が行われた後、ミニ和傘の製作体験を行った。あらかじめ準備されていた和傘の骨組みの間隔を均等に調整し、和紙を貼り付けるなどして傘を完成させた。最後に、和傘の管理の仕方や扱い方などの質問等があり、和傘について今まで以上に知識を深めた。



(林 陽典記)

第八回神道政治連盟時局対策連絡会議並びに神道青年全国協議会合同研修会

三月二日・三日に開催され、当会から二名が参加をした。今回の研修会は、神道精神を国政の基礎にと考える神政連が、保守の政治家を国政の場に送り、保守再生を図るための選挙活動の研修であり、そこに次代を担う我々青年会も協力するため合同で研修を受け、問題認識を共有し即対応が図れるようにするためのものである。

初日は自民党本部において、講演とパネルディスカッションが行われた。開会式では谷垣禎一自民党総裁からの挨拶があり、神政連だけでなく、我々青年会にも大きな期待が掛けられているとお言葉を頂いた。

講演は最初に神政連会長である宮崎義敬先生から神政連の使命と役割について

拝聴し、次に衆議院議員であり神政連国会議員懇談会会長でもある安倍晋三先生から保守とは



何かにについての講義を受けた。

パネルディスカッションでは安倍晋三先生をはじめ稲田朋美衆議院議員、山谷えり子参議院議員、神青協の久富真人顧問をパネリストに迎え、有村治子参議院議員がコーディネーターとなり保守再生に向けてというテーマで話し合われた。

その後の懇親会では自民党の国会議員の先生方や全国の神政連・神青協の方々と親睦を深めた。

二日目は場所を神社本庁に移して、三部構成で講演が行われた。最初は毛利康幸先生(山谷えり子後援会福井事務所事務局長)から選挙支援活動の実践について、続いて神政連首席政策委員である田尾憲男先生から時局問題と神政連活動について、そして最後に神政連幹事長の打田文博先生から総括・神政連の組織強化についての講演を受けた。

今回の研修で、民主党政権の進める永住外国人地方参政権付与や選択的夫婦別姓制の導入などの法案がいかに危険で日本国家の根幹を揺るがすものであるかを知るとともに、これから我々がどのような行動をすべきかを考える良いきっかけとなった。(中山貴生記)

神宮神青との合同研修会

三月十一日、神宮司庁会議室に於いて安藤塾(株)代表取締役社長 安藤大作先生に「三つ子の魂百まで」と題して講演を頂き、両会合わせて三十三名が参加した。

安藤先生は、神青会員と年齢が近いこともあり、大変恐縮されて話されていたが、ご自身の生い立ちから、青春時代の苦悩、挫折、がむしゃらに塾を始めた頃のお話まで、熱く語って頂いた。

その中で、今の子供達が抱えている悩みは多種多様で、私達の子供の頃より複雑であるというお話があり、そんな子供達に、神職の立場で何か出来る事が有るのではないかと、の思いが頭をよぎった。子供達が何十年後かには、神社を支える立場になってもらわなければならない事を考えると、安藤先生の講演は、

神社を通じての子供達の教化育成も、神職の重責で有るのではないかと考えさせられるよい機会となった。

(遠藤 玲記)



神青協中央研修会

三月十六日～十七日『己の一分』～現在、振り返るべき日本人としての誇りと自信』という主題のもと宮城県神道青年協議会の担当により仙台市内のホテルメトロポリタン仙台にて開催された。当日、全国より約四百三十名の青年神職が集い、当会からは会長を始め九名での参加となった。

第一講では高崎経済大学教授の八木秀次先生より「明治精神を学ぶ」という題にて講義を頂いた。戦前の日本における修身教育の秀逸、そして戦後の道徳教育の荒廃について学び、現状の学校教育のあり方について考えさせられるものであった。

第二講では「日本のこれから」と題してお茶の水女子大学名誉教授の藤原正彦先生より講演頂いた。冒頭に現在の国内は改革に次ぐ改革をしたが荒廃している原因は国民にあるとふれられた。そして、現在の我が国における国柄の欠如を嘆き、献身の必要性や日本人の卓越した美徳感受性による日本人としての精神、日本人らしさを育む重要性を説かれた。現況にお

る神社やその杜の重責を考える良い機会となった。

有意義な懇親を深めた翌日の第三講では、現在大相撲解説者であり元力士の舞の海秀平先生より「可能性への挑戦」について講演を頂いた。普段は知り得ない相撲界の裏側などを含め貴重なお話を拝聴した。今昔の相撲界の比較から問題提起され相撲界Ⅱ世の中の縮図であることを述べられた。

この二日間における三講全てが主眼に沿った大いに勉強になる内容であった。私たち青年神職にはこれからの神社界だけでなく日本全体の行く末を考え、担う歯車の一部の役割を果たし失われつつある日本人らしさを取り戻すべく献身的に活動しなければならぬと再認識させられたと同時に啓発された実り多き研修会であった。



(三橋 航記)

編集後記

お陰をもちまして、榊葉三十六号を皆様にお届けすることができました。

今年度は当会創立六十周年の佳節であり、夏に猿田彦神社で開催したお宮の子供会も第三十回となり、正に節目の年でした。表紙の写真は、お宮の子供会にて清流・五十鈴川で禊を行ったときのものです。子供たちのキラリと引き締まった表情がなによりも印象的でした。

そのほかにも充実した活動を行うことができました。それぞれ報告を本誌に掲載しておりますので、どうぞご覧ください。最後に、各活動にご協力いただきましたました関係各位に改めて御礼申し上げます。(時田)

報「榊 葉」

第 36 号

平成 22 年 3 月 31 日

発行者 神 田 基

編 集 総務広報委員会

発行所 伊賀市一之宮877

取 締 神 社 内

三 重 県 神 道 青 年 会